



(17) <愛する人は>

加奈子がどんな男とつきあおうが、年下だから、どうだと言うのだ！ 加奈子はもう立派な大人だ！ ましてや、物事の分別をわきまえている人間だ！ ジュノの中で、マークへの反発さえ感じた。

昔から、マークは何かと、加奈子に興味を抱いていたではないか！

ふと、そんな事さえ、思い出して、あらぬ邪心まで抱く、ジュノには、マークの好意は、ありがたいが、もう今は、沈黙して、見てみぬ振りが、友としての、友情ではないかと心の中で、反発していた。

無意識の中でつけていたテレビに映る、バレダンサーの舞う姿、「ラヴェルの、ボレロ」のリズムに、ジュノは言い知れぬやすらぎを感じて、引き込まれるように観ていた。

そういえば、いつだったか、加奈子とニューヨークを旅した時、加奈子がこのバレ公演を観たがったが、ジュノは、別の、今では何のミュージカルだったかさえ思い出せないが、お互いの欲から、ふたりで軽いけんかになった。

だが、結局は、ジュノの希望する、ミュージカルを観たのだったと、「ボレロ」を舞うダンサーの姿に、加奈子への思慕なの、懐かしさなのか、判別のつかない感情に、ジュノは苦しいような心が揺れる事に驚きながら違和感を抱いて、そんな、ジュノ自身に戸惑いながら・・・

そんな思いがよぎる中で、いつも、気になり、脳裏からはなれない心が痛む事、妹は今何処で、どうしているのだろうと思うだけで、いたたまれない思いに駆られてしまう。

どうしても、大杉さんにもう一度会う必要があると思い、出かけたが、以前訪ねた場所には、もう住んではいなかった。

強引なまでにソウルの両親に聞き、その場所を尋ねても、大杉さんは、そこにも大杉さんは住んではいなかった。

穂高のガイド、佐高さんは、大杉さんと、二十七年前のあの事故以来、何度も会っていて、時には一緒に事故現場を訪れては、母と妹の手がかりをさがし歩いたと聞いていたので、ジュノは、佐高さんにも、大杉さんの居場所を問い合わせたが、おしえられた場所には、やはり大杉さんは住んではいなかった。

ジュノの周りにいる人間は、誰も、今の大杉さんを知る者がいない事になる！

ふと、ソウルの両親は、まだ、ジュノに対して、すべての事、『真実を話してはくれない！』あの優しい、養父母にまでも、不信感を持ってしまう事が、ジュノは悲しかった。

誰も信じられない、そんな思いが、ジュノを不安にして、疑問を抱かせてしまう！

ふと、ジュノは子供の頃、まだ、寛之だった頃に、一度も父の故郷、岡山へ連れて行ってもらった事も、父から自分の故郷の話聞いた事がない！

『父の両親！、祖父母に、逢ってみたいと思った！』

このような、とても大切な事に今まで、なぜ、気づかなかっただろうと、ジュノは思った。寛之は祖父母に会ったことがなく、何も、祖父母の事を話してはくれない父だった。

大杉さんから、岡山に「おじいさま、おばあさま」がいると、何かの話の中で聞いた事がある、そんな程度だった事が、今になって、ジュノは、とても不思議に思える事だ！

写真すら見せてもらえず、岡山の祖父母、又、実の母の韓国の両親！

ジュノには、祖父母に当たる人がいることさえ、十歳まで、ソウルで暮らすまで、はっきりとは知らされていなかったのだ。

ジュノの実の母の国、韓国の祖父母にも、十歳までの寛之の頃も、今も、会う事も、話を聞くこともなく、だが、その頃は、母は、おそらく、韓国の両親とは頻りに連絡を取り合っていたことは、今のジュノにも想像がつくのだが・・・

実の母は、なぜ！ 事故を境に、すべての関係を断ち切らなくては、生きて行く事が出来ないほどの事があったのかが理解出来ない。

その事がジュノには、疑問と不安をつのらせた。

穏やかで、優しい母と、無口で音楽を愛していた父、暖かな家庭として、大人になってからのジュノは、寛之として育った頃が何よりも大切な事として、記憶していた事が、もろく、くずれて行く恐しさを感じていた。

そして、実母と大杉さんの関係が、どのような事で、繋がっていたのか、実の父と今の父と大杉さんの三人が親友としての、信頼さえも、断ち切るほどの出来事があったとは！ あの奥穂高山荘で、いったいどんな話があったのだろう。

たとえ、どのような事があろうとも、すべての事を、明らかにして、妹の行方をさがさなくてはと、心あらたに、ジュノは思うのだった。

たとえ、どんな真実があったとしても、父と母のあの優しい笑顔！ そして、大杉さんの大きな背中を思い出しながら、なぜ、母は、日本人である大杉さんをなぜ知っていたのだろうと、漠然とした思いがよぎった。

遠い過去が迫り来る美しき人の知らない歴史  
それは避けようのない定めか決まり事のように  
どんなに逃れようとしてもつきまとう運命のいたずら  
いく千の時間が過ぎても美しき人の力を超えた  
愛が物語る消す事の出来ない真実  
今はじまる道は夢想のごとく醜さと欺瞞にみちて

今のジュノには、人を恋する想いが苦痛になってしまったのだろうか、それでいて、心の虚しさがますばかりだ。

大杉さんに会わなくては、何も解決できないと、思いながらも、一向に大杉さんの居所がわからず、ジュノは、焦る気持ちと、疑念だけが膨らむ。

ある日、穂高のガイド、佐高さんがジュノの勤める病院に訪ねて来た、なんでも、ガイド協会の集まりがあるので、上京して来たのだと！、大杉さんの行方の事も気になるし！  
今回は、ジュノさんをお願いしたい、大事なことがあるのだと、いって・・・

夜にでも、時間をつくってほしいと、言って、一旦は別れて、その夜に、佐高さんの泊まっているホテルにジュノが出向いた。

待ち合わせの時間よりすこし早かったので、ジュノは久しぶりにひとり、このホテルの、スカイラウンジでワインを飲んで、気持ちを落ちつかせていると、ジュノのいる席からすこし離れた場所にひとりの女性がいた、ジュノはその女性をどこかで見覚えがあった。

なん度か、ちらっと、見て、目をそらせては、思い出そうとしたが、その時は、思い出せなかった、だが、佐高さんの「個人的な話なので部屋」で、会いたいと言う事で、ジュノは部屋を訪ねて、驚いた、さっきのあの女性がいるのだ。

佐高さんの紹介した、この女性は、信州、安曇野で、実家は観光事業などを手広くやっている。佐高さんのごく親しい友人の娘さんで、ご自身は今、養護施設の仕事をしているのだと言った、だが、今、胃がんにおかされて、地元の病院で、早急に手術する事になったのだが、出来れば、ジュノに手術をお願いできないだろうかとの、相談であった。

三人で話しながら、ジュノはこの女性に、何処で会っているのだろうと、思い出そうとして・・・

そうだ、確か、アメリカの大学時代に、学部こそ、ちがうが、一年先輩にいた人！  
しかも、加奈子とは、親しかったように、思い出された。

同じ、日本人同士と言う事で、学部が違っていても、この女性

「田神りつ子は」

自分から親しげに、加奈子に近づいて来たと、そんなふうに聞いていた。

今、目の前にいる雰囲気とは違う、アメリカでの頃はいつも振る舞いが横柄で、男子学生に囲まれて、マドンナ的存在の派手なつねに目立つ女性だった。

彼女は、あるとき、真面目に勉強に励む、日本人男子留学生を、その気も無いくせに、さも、気があるようなそぶりを見せては、軽く誘惑する、そんな言わば自墮落的な生き方をしていた。

正義感の強かった、ジュノには許しがたい人間であった！

そして、その内のひとりの男子学生が、本当の理由は、分からないが自殺にまで、追いやったとも、聞いた事がある。

そんな良くない噂を、加奈子から聞かされて、ジュノは、いつもその度に、言い知れぬ、嫌悪感と腹立たしさを感じたものだった。

あれ以来、二十年近い歳月がすぎて、今、目の前にいるこの人は、あの頃の雰囲気がまるでなく、四十歳を迎える女、病気のせいもあるのだろうが、歳よりは老けて見える、生活に疲れた感のある、

「ただのおばさんだった。」

今、ジュノは、アメリカでの事、加奈子の事を話すべきか、ためらいを感じていたが、りつ子の方から話し始めた・・・

「加奈子は元気なの！」

「あなたたち、結婚しなかったのね！」

「ちょっと、がっかりだわ～、かげながら、気にしていたのに！」

とあっさりと言うのだった。

そして、りつ子は！いつだったか、マークからメールが来て、知ったけど、加奈子は今、若いパートナーと、「しっかり、楽しんでるようじゃないの！」と、言って、ジュノを驚かせた！

なんでも、アメリカ時代からの、ボーイフレンドとして、りつ子とマークは今も、つきあいがあるのだと言って、ジュノをおどろかせた。

(18) <古い友人の話>

マークがああ頃の、彼女の取り巻きのひとりだった事も、ジュノには、はじめて知る事だった。友人としてマークを信じていた気持ちが、なんとなく、軽いものになった気がした。

佐高さんからは、大杉さんのその後の消息は何も新しいことが分からず、ジュノは、やはり、ソウルの両親には辛い事なのかもしれないが、会って、まだ、話されていない事があるのだろう、真実を、聞かなくては、妹の事も、実の父の事も、何も、分からないままでは、ジュノにはやはり、辛い現実のままだった。

だが、今日、この「田神りつ子」に出会った事が、ジュノの運命に大きく係わって来る事など、今、目の前にいる、彼女からは、想像も出来ない事が、この女性「田神りつ子」にはあった。

古い友の悪戯な囁きは忘れかけてる想いが痛い  
平凡な女の裏側に潜むそれは悪戯なのか  
偽りの微笑みは友情とは名ばかりの軽さ  
遠い日の愛しさは苦しみの真実と渴き  
今、美しき人の姿を際立たせて誰もが憧れる芸術  
医術と言う芸術は誰でもがまねの出来ない力と技

考えもつかない、女性、田神りつ子との再会は、少なからず、ジュノは加奈子を否応なく思い出させて、愛おしさと胸の痛さを感じた。

孤独感で、ジュノ自身が押しつぶされそうな状況の時、ジュノの唯一の甘えられる存在だった事から、ジュノの痛みや苦悩を一方的に加奈子へ向けた仕打ちだった。

ジュノは切なさ、心のどこかで、加奈子のぬくもりを求めているジュノの自分自身の心の動きの不安定さ、戸惑いから加奈子への冷酷な行為だったが、気まずく、心がすれ違ったまま、別れてしまった加奈子だった。

佐高さんは、どうしても今日のうちに仕事上で会う人がいるといい「りっちゃん」とは、友達だったのなら、つもる話もあるだろうと、ジュノとりつ子をホテルの部屋に残して、急ぎ、出かけてしまい、なんとなく、ふたりの間で気まずい空気が流れたが、りつ子は、持ち前の人なつこさで、りつ子自身から話し出した。

「どうして、加奈子と別れたのよ！」

「あんないい女は、そうはいないのに！」

私がつき合っていた人の中では、

「とても信頼のできる人よ！」

少なくとも、私の知っている女性の中で、私は一番信頼できる人と思って、いつも、見ていたのよ、加奈子をね！

「ほんとにもったいないわ～！」

このままじゃ、マークが狙っちゃうかも！ それでもいいの！

やはり、あの頃の、りつ子だった！、どこか、ジュノの心の奥底をのぞき込むように、そして、容赦なく相手の痛い部分を、攻めるような、いたぶるような、面白がるような・・・

ジュノは、人間は、そんなには、変われないものなのだと、思いながら、もう、加奈子の事には触れて欲しくなかったの、話を、無理に、りつ子の病気の事に触れた！

りつ子は「私、もう、長くないらしいのよ！」

でも、ジュノの手で、終わりにして貰えれば、すこしは、気持ちが楽になれるかと、思ったの！

それよりさあ～、私、「貴方が好きだったの、知ってたあ～！」

「知るわけないかあ～、知らないよね！」

「ジュノは、加奈子ひとすじ！」

と言うより、加奈子のジュノに対するガードが、凄かったもんね！

又しても、りつ子は、あの頃の事の話に戻して来た、ジュノは、覚悟した！ 言いたい事があるのなら、今のうちに言ってしまえ！ これから、おそらく、毎日顔をあわせるのだから、くだらない話は、ここで、聞いてしまったほうが良いと判断した。

「貴方さあ～一時期、ひどく痩せた時期があったよね！」

「なんとなく、顔の表情がきつくて！」

「怖いほどに、だけど、わけのわからない、憂いがあって！」

「凄く、素敵で、凛とした姿がいいんだよね！」

「ひどく、落ち込んでそうでも、笑顔がきれいでさあ～」

「でも、すこし、体に肉がついて、顔がちょっとだけ、丸くなってた時は、本当に素敵でセクシー、その姿がたまらなく、良かった！」

「まるで、金太郎さんを、かっこよくして、走り回ってるようで、少年のような、しぐさが、可愛くてね！」

つい、私、手を出したくなって、加奈子を通して、ジュノを見てたのよ、そんな私の事！ ジュノ、知ってた～！ でも、どこか、本気で、手を出す事が出来ない！、大げさに言えば、気高さが、怖かったような雰囲気があっただけさ！

むりやり何とか出来ない、不思議な、キレイさがあるね、いつも、貴方の姿を見ると、自分の中の空虚な感情と女としての誇りのようなものが、わたし自身の中で喧嘩をしてるんだよね！

そんな、同じような話を並べ立てて、話が尽きたのか、ジュノは、聞き手一方だったから、さすがにりつ子も、恥ずかしくなったようだ。

りつ子は真顔になって、佐高のおんじーから、ジュノの事をきく前から、貴方の外科医としての優秀さは、知っていたのよ！

本当は、私が、直接、会いに行つて、お願いしたかったけれど、佐高のおんじーが、ジュノと親しいから、私の手術をお願いしてくれると、言ってくれたのよ！

もっとも、私が直接尋ねても、会ってもくれなかったかしらね！

アメリカ時代の頃の私はたぶん、ジュノに嫌われていたんでしょう！

そのくらいは、私も分かっているんだけど、いくら、「馬鹿！」やっても、ここは（胸）熱かったんだ！

りつ子は照れながらも、自分の心は、まるで、清らかだといわんばかりに、ジュノに話し続けた！

佐高のおんじーから、「お母さんと、妹さんの事、聞いているわよ！」

私ね、はじめは、そういえば、子供の頃、父親が、貴方達の事故の時、捜索隊の一人として、何日も山へ出かけていたのを思い出したのよ！

それと、あの事故の年か、もっと、あとだったか、よく覚えていないけど、たぶん、ジュノのおかあさんと妹さんに、『会ってるかもしれないのよ！』

けどね、穂高ではないのよ！、別の場所にある山小屋で、会っていると思うの！

親戚の山小屋を手伝いに行った、夏休みの終り頃か、それより前なのか、後かな～、山に凄く雪が降つてね、季節はずれの、大雪が降つて、親戚中の人々が、借り出された時にね！

それと、はっきりとした、自信の持てる事ではないのですけれど！ 十五年くらい前になるかな、私の住んでいる信州、安曇野でね、たぶん、ジュノのお母さんだと思うけれど、あの山小屋にいた女の人に会っているんだよ、確かなことではないので、今まで誰にも話してないけど、ずーと、気になっているのよ、なぜか、わからないけどね！

突然の訪問者は言うきつと叶う夢だと

その口が真実を言うのか君はいつだって軽く



誰かを誘い惑わす、美しき人はただ信じたい

もう何度この胸を弾ませて夢を見てきた美しき人の願い

誰も私を騙さないであの山の彼方にいた母の姿を

ジュノは、「りつ子は確かな記憶ではない事だけれど、母と妹に会っている！」とおぼろげな確信を持った、その後にも、りつ子は母には十五年ほど前にも、信州、安曇野で、出会っていると言う！

りつ子の、あまりにも簡単に話す事が信じられず、疑念さえ覚えるが、ジュノはりつ子を信じたい！

今は、どんな小さな情報であっても、ジュノにはありがたくて、大切な事で信じたい情報だった。

ましてや、今のりつ子はアメリカ時代のような、小悪魔的で退廃的な生き方ではないようで、あの頃のりつ子を知らなければ、誰でもが、信頼する人物に見えるだろうし、雰囲気的にも、セレブなご婦人！、社会的に認められた女性の姿だった。

現に、りつ子はアメリカから帰国してすぐに、一人娘だったこともあり、親の仕事を継ぐ為に、親の進めで、地元の事業家と、極めて平凡な結婚をしたと、ジュノは、りつ子の一方的な、自分のこれまでの生活や、今の仕事の事などを長々と話して聞かせた。

ジュノが驚きと戸惑いの中で、一番聞きたい、母と妹の事も、なんの戸惑いもなく、簡単に話す、りつ子の姿に、ジュノはどう、反応すればよいのか、定かではないが、あの事故にあった頃の事なのだろうか！

りつ子は、さも、もったいぶるように、ジュノの戸惑いを楽しむように、あの頃のりつ子の嫌な部分を見ているようで、りつ子の口元だけ派手に動く、得体の知れない、生き物に見えて来た！

ジュノの心がオドオドしている姿を垣間見て、喜んでいるかのような意地悪さが見え隠れする。りつ子はやはり、魔女で、人の心をもてあそぶ悪魔的人間だった。

「でもね！本当に、あの事故の後なのかな～、十一歳の子供の頃でしょう！」

「私、あまり、はっきりした、記憶じゃないのよ！」

「それに、嫌々手伝われていたし！、寒かったしね！」

と、気だるい、口調ではなした。

今思うと、たぶん、あの事故の事を、ニュースや父親が何日も捜索に出ていたから、覚えていたのかもね～、そう思えば、なんだか繋がった記憶になるのよ！。

手伝いに行った親戚の山小屋はね！「槍ヶ岳へ向かう途中の小屋」なのよ！登山客は誰もいなかったのよ！私も最初は、誰かが、いるなんて、知らなかったのね！

大雪が降り、予定より早く山小屋を閉める事になり、親戚中の者が借り出されて、小屋じめの仕事をしていて、お布団を片付ける為に薄暗い、「普通はあまり使わない個室」に入ったら、人がふたりでうずくまっていた！、驚いたわ～本当に！まるで、「幽霊か、お化けがそこにいた！」

そんなふうに見えたのよ、私は怖くて、足がすくんで動けないほど、おどろいたのよ！

小屋の人達も、誰も、無断で入っている人がいるなんて、思わないから、いつもいる小屋番の人にも知らないみたいだったから、急いで、おじさんたちに知らせたわよ！

ふたりとも、かなり体が弱っていて、動けない状態だったので、あすにでも、小屋番の男の人と一緒に下山させるからと、伯父はそのふたりに話して、その夜は、ゆっくりと休んで貰うことになったのよ！けれど、朝になったら、ふたりとも、消えて、いなかったのよ！！！！

(19) <幻の母>

大雪が降って大変な状況の中、いなくなってしまったので、とてもみんな心配したわ！。そのあと、小屋の人たちとみんなでがずい分さがしたけど、見つからなかったのだとりつ子は話した。

「私はその後、どうしたかは分からなかったわ～」

「子供だったし、その後は山には入らなかったしね！」

それがね！、今から十五年くらい前だと思うけれど、安曇野の、ある、養護施設で、あの時の女性！、たぶん、ジュノのお母さんだと思う女の人に会ったのよ！。

私が所属していて、キリスト教会が運営している福祉施設を、うちの会社が手助けをする事になって、私は、そこの代表者になる事で、打ち合わせの為に何度か、施設に伺った時に、二～三度、姿を見ているのよ！

「ジュノのお母さんだと思う女性にね！」

「とても、不思議な気持ちでしたわ！」

あの山小屋で会った時の、表情がとても印象深かったのよ！ 安曇野でお会いした時、言葉は交わしてはいないけれど、あの時の人だと、すぐに、思い出したのよ！。

その時の、福祉施設の関係者にお聞きしたら！ 教会の牧師様からお頼まれしている方で 「養護施設のお手伝いをして頂いている方です！」とはなされていたわ！

でも、私が正式に、そこの代表者になった時にはもう 「ジュノのお母さんらしい女の人は」そこの施設には、いなかったのよ。

ジュノは、りつ子の話す事が、本当の話なのか、信じられない思いもするが、全くの作り話でもない事で、ありえる事だと思った、何かしらの手がかりがつかめた気がした。

だが、一方では、そのような事があったのなら、りつ子はなぜ！佐高さんに話さなかったのだろうと、りつ子の話した事に不安と疑問を感じた。

季節はずれの雪はどれほどの苦しみに耐えて  
恐怖と闇に閉じ込められて寒さに震えながら  
幻の父『ヒョンヌ』と母の呼ぶ声は届かない  
心の中のすべてが父を求める母の想い

胸が張り裂けるほどの苦痛と悲しみは心を無くして行く  
近づけない影を求めて今日も涙する美しき人

ジュノはりつ子のお話を信じたかった、けれど、あれからもう長い年月が過ぎて、あまりにも、孤独な時間を強いられているジュノは、母や妹の事になると、異常なほど、心が騒ぎ、時には、怒りにも似た感情を抑えることが出来なかった。

りつ子のジュノに対するいわば悪戯にも似た行為が、ジュノには耐え難い行為におもえて来て、今にも、りつ子に対して、反撃的な言葉を発する思いを必死で抑えていた。

そんなジュノを、りつ子はさすがに心が痛んだのか・・・

「あの方は、きっと！ジュノのお母様だったのよ！」

「美しい人で、今、思うと、なんとなく、ジュノに顔立ちが似ていたように、思えるけど！」  
もし、なんだったら・・・

「あの時、お話した、牧師様にその後の事を、お尋ねしてみましようか？」と！  
なんとなく、取ってつけたような言葉で、ジュノに擦り寄ってきた。

りつ子のその態度が、又しても、ジュノの気持ちを逆なでして、益々、りつ子の事が信じられずに、ジュノを混乱させた。

ホテルのこの部屋の空気が重苦しくて、におうはずのない、鼻を突く、悪臭を感じた、窓の外の風景もきらびやかな激しい色あい新宿の街はジュノにはただそれだけで、嫌悪感を覚える。

そして、又しても、りつ子は、ジュノにはあまりにも、とっぴ過ぎる事を口にして、平然としているばかりか、むしろ、得意げに話した！

「ジュノは、知ってるの？」

「加奈子があかちゃんを生んだのよ！」

「男の子だったそうよ！」

ロスのマークから、聞いたのですけれど！

ジュノの子供なの？ それとも、あの今の若い恋人ロイの子供なのかしらね！

そんなとんでもない話を聞かされても、ジュノは、誰の事なのか、ただ聞き流しているばかりだった。

それもそのはずで、ジュノには確かな記憶ではないが、身に覚えのない事だと思いたい、だか、本当のところ、ジュノの記憶の中で、全く、違うのだと、言い切れるほどの、確かな記憶がない、抜け落ちたあの頃の事！ ジュノの心はかすかな反応する！

気がかりではあっても、どこか、他人事のような、絵空事にしか感じていなかった、この時期

のジュノの精神の異常さを誰も気づいてはいなかった。

どうしても、この狭いホテルの部屋に、りつ子とふたりで居る事に、耐えられず、ジュノはりつ子の名刺を受け取り、病院での診察日を連絡することにして、早く、この場を立ち去りたいと思い、必要な事だけをりつ子に告げて、急ぎ足で、ホテルの部屋を出た。

りつ子の話を信じたいと思いつつも、ジュノに対してみせるりつ子の軽薄な言葉や態度に怒りの感情がりつ子との接触を拒みたい衝動に駆られた。

だが、今は、りつ子のもたらず、情報しかない事が、ジュノには辛い現実だった！  
相変わらず大杉さんの居場所が分からず、ジュノはこれから、妹をさがすべくすべをどうすればよいのかが、思いつかずに時間だけが虚しく過ぎて行く事に耐えている。

ジュノの心にいつも刺さったままの棘のような痛さで、妹の行方が気になって心配な事だ！

そんな思いの時、突然、実の父の実家、

『岡山の家は今、どうなっているのだろうか！』

と、今まで、ジュノは、実の父の故郷を考えた事がなかった事が不思議だった！

確か、父はひとり息子だったと聞いた記憶があった、実の両親は、ジュノ（寛之）にお互いの、祖父母の事や実家の事を何も話してくれなかった。

むしろ、どんな事だったか、思い出せないほどの、些細な話しを、大杉さんから、ジュノは聞いた気がする。

父や母が、どのような事情があって、自分達の生れ、育った、家や場所、そして、どんな環境なのかを、子供だった、寛之や妹の樹里に話す事が出来なかったのか、今となっては、確かめる事さえ出来ない。

ジュノは、父の生れ、育った、岡山の家を訪ねてみようとの、思いが強くなって行った。

ソウルの父から、住所だけは、聞くことが出来た、ソウルの養父母も、実の父の実家の住所だけしか分からない、写真の一枚さえない事が、とても、不思議さと言ひ知れぬ不安をジュノは感じた。

季節は何度も変わり通り過ぎてもこの重苦しいほどの怒り

恋しい気持ちなのか愛しい想いなのか

まだ見ぬ世界に強く引き寄せられて行く感情

蒼ざめた空をみては虚しく恋しさが募るおもい

美しき人の心がさわぐ誰が私を呼ぶのか

この世でただひとりの妹よ美しき人の心の声をうけとめて

ジュノの心はひどく混乱し、目に見えない恐怖なのか、喜びなのか、判断のつかない実の父の故郷への憧れを抱き、乱れる思いが苦しかった。

そして、あまりにもとっぴで、信じがたい、りつ子の話した事をふと、突然、脳裏を刺激して、思い出した。

『加奈子が子供を生んだ！』

その事が、ジュノの心情をかき乱すけれど、加奈子に対して、どのような態度をとれば良いのか、今のジュノには思いつかないけれど、心の中に、重石を抱えたような、苦しきがある、ふと、加奈子の姿を思い浮かべては、ジュノは心が華やぎ、加奈子に触れたあの柔らか胸のふくらみ、弾むように、ジュノの少し大きめな手で包み込む、加奈子の乳房は、いつも小刻みに震えて、喜びを伝えてくれた。

ジュノとの、その幸せを共に、何度も加奈子とのくちびるをあわせてはこの上もなく、深い、ふたりの愛を確かめ合っていたあの頃・・・

あの、なにものにも変えがたい、ふたりの交わりは、ジュノが今までに感じた事のない、特別な幸福感であったはずなのに、ジュノが、加奈子に与えた苦痛を思うとき、ジュノは今、どうすれば良いのか、迷いだけが、一人歩きしていた。

加奈子の生んだ子、どんな赤ちゃんなのだろうと、思うだけで、逢ってみたい衝動なのか、確かな、現実の事なのか！まだ、すべてを受け止められずに、ジュノ自身の心は小刻みに乱れて、戸惑いを感じる、だが、加奈子からは、何も、連絡もなかった。

ジュノと加奈子のはっきりとした、別れの言葉を交わしてはいないが、お互いの感情のすれ違いを埋める事は出来ずに、ジュノのもとを去って行った加奈子だった。

だが、ジュノも、加奈子も、心の奥深いところに、お互いへの思慕を感じながらも、もう終わった事なのだと、自分に言い聞かせていたのだ！

今の加奈子にはロイという新しい恋人との生活がある事で、ジュノは加奈子への連絡をかたくななまでに、絶っていた。

「子供が生れたとしても、かかわらない事だ！」

ジュノ自身の揺らぐ思いや定まらぬ気持ちを伝える事など、これまで加奈子に対して、ジュノが

与えた苦しみを思えば、どんな些細な好意であっても、見せてはいけない事なのだと、ジュノ自身を納得させていた。

ジュノが今、行動すべき事は、妹の「樹里」をさがす事が大切！大杉さんの行方をさがして、まだ、明らかにされていない、ジュノの中にある疑問や不安を取り除かなくては、ジュノはこれからの生き方や人としての喜びを得る事が出来ない！

ジュノの感情などお構いなしに、さっそく、りつ子は、ジュノのいる病院へやって来て、必要な診察と検査を済ませて、今、正式な病状の診断結果待ちだった。

ジュノは、りつ子が胃がんであり、それも末期である事は、はっきりしたが、手術をするべきかが、迷う病状だった。

もし、手術が成功したとしても、おそらくは「半年」長くても一年の時間だろうとの診断であった。

りつ子は、地元の医師からも、おそらくは、同じ事を告げられているようで、どこかで覚悟しているようなところがあった、ジュノは、りつ子との接点を極力避けたい気持ちが強く、りつ子の主治医は別の医師に担当して貰っていたが、何かと言うと、りつ子は、ジュノに会うことを要求する。

りつ子の今後の治療方針が決まらないままに、ジュノはりつ子を避けるように、思い切った行動をとった！ 実父の故郷、「岡山へ」向かった！！！！

(20) <新たなる運命>

ジュノはこれからのじぶんの人生に、果たしてどんな運命が訪れるのか、全く予想もつかない恐ろしさを感じて、体の震えが止まらないほどだった。

自分の新しい希望が途轍もなく大きいように思えるのだった。

空は何処までも高く雲はゆっくりと流れて  
そこにすむ人は誰ですか不思議さで惑わず出逢い  
美しき人は締めつけられるほどせつなくてこの心が乱れる  
幼き君を思う兄の想いは追い求めるしかない  
幼い日々の愛おしさが幻の姿をみる  
父と母に出会えるそんな気がする幻影

ジュノの考えも及ばない現実が、その地にはあった！  
父の故郷、「岡山県、M市」

新幹線の岡山駅から、タクシーで二時間、家もまばらな、山村風景の中に、ひととき大きな古い屋敷があった。

『ジュノは生れてはじめてみる風景、父の故郷！』

この静かな、山村、父の生家は、この地では名の知れた名家だと、聞く、ここに向かうタクシーの運転手も知っていたほどの地元では江戸時代から旧家で、名家だと、ジュノは知った。  
ジュノがいろいろと思い悩む事など、無用な心配であった。

時間が早まわりするような息苦しさから、ジュノは何度も、何度も、深い深呼吸をして、「お屋敷」と言われる、その家の門の前にたった。

仕事の都合上、岡山行きを、急ぎよ、つくり出した時間は短い為に、ジュノは、父の実家へは、東京を発つ前に、連絡をいれた。

ジュノがどのような人物で、どのような用件で、伺うかを、話して、驚いた事に、すでに、父の実家

『蒔枝家』では、ジュノの事は知っていた。

『いつ、お尋ねくださるかとお待ちしていました！』

との答えが返ってきたのには、ただ、驚き、ジュノは、何か言い知れない、期待感と恐怖感がないまぜに、落ちつかなさを抱えて、岡山に旅立った。



この「お屋敷」といわれる、大きな門と、古いつくりだが、どっしりとした、黒塗りの土塀が、古き良き時代をあらわし、その姿を覗ただけで、ジュノは、懐かしさのような、親しみを感じた。

だが、十歳までの寛之としての記憶にはない、この風景であって、大杉さんに、子供の頃に、聞いたような、不確かな記憶から、ジュノは無意識に、思い描いていたのだろうか。

大きく、どっしりとした、門の扉はすでに開けられていて、ジュノが、この家の門の前にたった時には、すでに若い男性が迎えに出ていた。

『イ・ジュノさんですね！』

と、言葉をかけられて、ジュノの不安を少し除かれたように、穏やかさを感じさせてくれた。

『お待ちしていました、さあ～ どうぞ！』

ジュノは挨拶を交わそうとしても、ただ、お辞儀をするだけで、言葉が出てこなかった。

見るからに、手入れの行き届いた、大きな庭は爽やかな風が通り、ジュノの緊張感を優しく、解きほぐすような心遣いを感じた。

門から続く、少し長めの敷石の通りが母屋へつづく、この家の正式な玄関なのだろうか、若い男性は静かに気品あふれた、重そうな引戸に手をかけてあけた。

風格のある、どっしりとした、黒光りする柱や、梁の太さには、ジュノは今まで見た事がない建築物で、驚きながらも、清潔感に気持ちの良い、応接間というのだろうか、懐かしい映画の世界で観た雰囲気とする落ち着いた部屋に案内された。

先ほどの若い男性がこの家の主だと、正式に挨拶があった。

お互いの挨拶を交わしたあと、ジュノは、どう話を進めようか、考えめぐねていると！

男性は、私の方から、紹介させてくださいと言って！ 私は遠い親戚から、養子として、迎えられた、

『蒔枝直樹』 という者です。

ジュノは、今、祖父母は健在なのかが、とても、気になっていた事をいち早く察した、この男性は、ジュノが傷つかない言葉で、静かに落ち着いた言葉で祖父母の事を話し伝えてくれた。

やはり、祖父は十五年前に、「七十八歳で、亡くなったこと」

「祖母は、八年前に、亡くなった」と話した。

今、この家に、住む者は、「私だけなのです」と、直樹と名乗った、この男性の話だった。

直樹は、祖母から、生前に、ジュノさんのお父上の事、ジュノさんの事を、お聞きしていますので、存じていましたが、私も、どうお話すればよいのか、何からお話すればよいのでしょうか！

少し、お休み頂いたあとに、おじいさま、おばあさま、そして、お父上のお墓へご案内いたしますので、すこし、お休みください！ と、言って、直樹はその場を立って行った。

ジュノの通された部屋は、造りこそ古いが、ガラス戸の重厚な造りの引き戸越しに、日本庭園風の庭が美しく見えていた。

すこし時間が過ぎた頃、直樹は、ジュノを「蒔枝家の墓所」へ案内して・・・

驚かれるでしょうが、今は、ありのまま、お参りして頂き、後ほど、お話をさせていただきます・・・

ジュノは、直樹の落ち着き払った態度が、とても気になっていた。

今回、生れて、はじめて、訪れた！

「父の故郷！岡山！」

しかも、ジュノが、連絡するまでは、母が死んだ事も知らないはずだ！

ジュノ（寛之）も、妹の樹里も、行方不明のままだったはず！

案内された、「蒔枝家」の墓所には、驚いた事に、私、ジュノ（寛之）は死んだことになっていて、父と共に墓所に葬られていたのだった。

これはいったい、どういう事なのだろうか？ ジュノはあまりにも大きなショックを受けた！

この、蒔枝家では、ジュノを亡くなった事にしなければならないほどの、事情が、それほどの事があったのか！

私は十歳だったけれど、幸せな子供時代であったし、あの事故の事も、はっきりとした記憶が！

『ジュノとして、寛之として』 確かに存在として、今、ここにいるのに！

この私の人間としての証明はどうすれば良いのか、ただ、混乱を深めて、恐怖で体が硬直して行った！

私の生きた存在を誰が消してしまったの

あの幼き日の美しき日々が消えていく

何処に行ってしまったの父の故郷のむごすぎる真実

美しき人を戸惑わせて冷たい石に刻む

惨酷な真実は私がどんな罪を犯したと言うのか

想像も出来ないほどの残酷な運命



(21) <自分の存在>

ジュノが亡くなった日とされていたのは、あの穂高での事故があった日から、およそ、一年が過ぎた時期になっていた。

その事が、これからの、ジュノの運命なのか、通らねばならぬ、「寛之」と「ジュノ」としての生き方を試されるような事が待っていたのだ。

大杉さんと言う人物の存在が、ジュノの人生の中で、

『どうすることも出来ない、心の中の重石！』

ジュノの人生のすべてをかえて、何が目的だったのか！

大杉さんの真実の姿をあきらかにする事が、ジュノの未来なのだろうか！

しかも、父の故郷と同じ、この地は、大杉さんにとっても、

『大切な故郷のはずだ！』

ジュノ（寛之）の実の父、『蒔枝伸一郎』

そして、大杉さん、そして、ソウルの養父の三人は、東京大学での親友として青春を過ごした、ソウルの養父は韓国からの医学留学生で、実の父の一年先輩だった事は聞いていた。

故郷が実父と同じ、ごく近い地で大杉さんは育ち、中学、高校も同じ！、東京大学では、大杉さんはドイツ文学を学んだ。

だが、直樹の話では、「蒔枝家」と「大杉家」は昔からのつながりの深い、間柄だった事、大杉さん自身は、朝鮮半島で、生れて、五歳まで、朝鮮で育ち、終戦の混乱の中で、両親と共に、日本（岡山）に引き上げて来た時は七歳だったと、直樹は、生前の祖母から聞いておりますと、話した。

大杉家は、元々は蒔枝家の親戚で、蒔枝家の分家筋にあたるが、一家で、朝鮮半島に渡り、音信不通の状態が長く続いて、帰国したのは、大杉さんの両親と大杉さんの三人だけで、何も持ち帰る

ことが出来ないほど、命さえも危険を乗り越えての帰国だった事を直樹はおばあさまから何度も聞かされておりましたと話した。

「身一つでの朝鮮半島からの引き上げだったとか！」

その時期に、日本の統治下の朝鮮半島に暮らしていたひとたちが誰もが体験した、悲惨な出来事が多くあった。

「太平洋戦争が、日本の敗戦が決定的になった、戦後、間もない時期で、日本も、朝鮮も混乱していた時代だった。」

誰もが、自分だけ何とか生き延びて、祖国、日本に帰れる事だけが望みのすさんだ、世の中だ

った。

現在の岡山では、大杉家は子供は大杉さん一人だから、大杉さんの両親はすでに他界して、空き家になってから、もう二十年もの間、誰も守る者もない、荒れるがままに放置されている状態だと、直樹は話した。

あの穂高での事故の一年後に岡山に、帰郷して、大杉さんは、ジュノ（寛之）も、亡くなった事を、蒔枝の祖父母に報告していた。

美しき人にはどんな運命に耐えて  
待っている人などいるはずもなく  
傷つだけの旅  
悲しみだけの旅  
記憶のない風景が広がり  
美しき人を優しくつつんでくれても  
心をめぐり取る現実是谁が描いたストーリー  
何もかもがガラス細工  
私の求める愛は何処にも存在しない

仕事に追われる身の忙しいジュノは、無理に時間をつくっての岡山行きだったから、予想もしていなかった、驚きの真実を受け入れる事が出来ない混乱する思いながらも、ジュノは今、何かを変える事も出来ない！

眠れない一夜を、父の実家「蒔枝家の客間」でジュノ自身が、何者なのか分からなくなる恐怖におびえながら、朝をむかえて、そして、混乱する気持ちのまま、早朝には東京に戻った。

岡山で知らされた事、ジュノには、想像も出来なかった事！

『自分はすでに死んだ、人間にされていた！』

しかも、その事を、祖父母へ、告げていたのが、大杉さんだった事が、ジュノは、大きなショックを受けて、どう、理解すればよいのかが、分からないままだった、謎や、疑問、不安が深まるだけの、父の故郷への訪問だった。

どんな状況の中でも、ジュノにはあまえることの出来ない日常！

仕事が、容赦のない現実が待ち構えていた。

まず、りつ子の手術が決定して、時間を置かずに、行われ、ひとまず手術は成功した。

我儘な、りつ子は、手術後の苦しみを、駄々っ子のわがままのように、騒ぎたてて、人を困らせ

る事を、あたりまえのように、振舞うものと、覚悟していた。

ジュノは、いつ呼び出しがあるのかと、困った「お人」だと思っていたが！

ジュノの予想に反して、術後のりつ子のすがたの変わりようが、あまりにも違っていた！

我儘ひとつ言わない、静かで、我慢強く、苦しみや痛さにじっと、耐えている、人間性もあるのだと驚きととまどいながら、りつ子の経過を診ていた。

大抵の患者は、普通、術後の苦しみに耐えられずに、看護師を呼び出すことが多い中で、ジュノが見て来た、りつ子の今までの姿ではない、人格を見つけた事にとっても興味を抱いた！

りつ子と言う人間を、もっと信用しても良いのかも知れない！

そんなふうに思うジュノの心境の変化だった！

手術後のりつ子の経過も、良いこともあり、ジュノはふと、岡山での出来事を思い起こしながら、今になって、不思議に、直樹に対して肉親のような、親しみを感じて、直樹に会いたい感情になる自分に戸惑うが、それと同時に、妹、樹里は、今どうしているのかが、不安で気がかりだった。

りつ子の経過も良い事で、りつ子の地元の病院への転院を考えていたある日、突然、アメリカ時代の友人、マークがジュノを尋ねて来た、もちろん、りつ子への見舞いも兼ねている事ではあるが・・・

どうやら、お互い、何処までが本気なのかは、計り知れないが、りつ子とマークは恋人同士としての過去につきあいがあったようで、マークは少し、りつ子の事が心配なのだろう。

三人で語り合う、わずかなひと時、りつ子の病室は、遠い昔の、アメリカで過ごした学生時代が懐かしい時間ではあるが、そこには、加奈子のいない事がジュノの気持ちは何処か寂しく、何か物忘れしてるような感情になった。

マークの突然の訪問は、ジュノも、りつ子にも、驚きとほろ苦くて懐かしい思いと、ある不安が、的中していた。

どうやら、仕事での来日もかねているのだと！マークは強調したが、洩れ伝わって来ている情報では、マークは、ロスで、小さな出版社を経営してはいるものの、経営状態は危機状態だとか、どうや

ら、昔の間柄を頼りに、りつ子からの融資を期待しての来日のようだった。

そんな、マークからのジュノへの報告は

『加奈子が、若き恋人ロイと結婚した！』

と何気ない、意地の悪さが、見え隠れして、ジュノにつげる、マークの姿は、密かに、ほくそ笑む、心の貧しさを、ジュノは感じて、少し寂しい思いになった。

それは、加奈子の結婚報告を聞いたことだけではない！  
親しい友としてのジュノのマークへの信頼が揺らいだ事の重さを感じたからなのか！

「ジュノの中で、信じがたい、加奈子の結婚！」  
この事が、後に、ジュノの運命に大きく影響して来る事など、今のジュノには、予想すら、出来ない事だった！ ただ、ジュノの心の乱れ、いい知れぬ不安なのか、嫉妬なのか！  
冷酷なまでに、加奈子を拒否した事への懺悔の思いなのか！  
言い知れぬ心が乱れる、ジュノの執拗なまでの自己保身なのか！  
長い間のジュノ自身が気づかない、傲慢さが、見え隠れしていた。

嫉妬する想い  
この心は彷徨い  
美しき人を苦しめる  
戯言に惑う想い  
未来の君は  
何におびえて  
私を見ているのか  
あの光の中で  
幼子を抱く姿に  
美しき人は嫉妬する  
母の面影と重ねあわせて  
いつかこの手に抱く幼児

## (22) <傷心>

ジュノの定まらぬ気持ち、加奈子とロイが結婚したと聞くと、傷心のままで、ロスへ帰して、一方的に別離を決めさせてしまった、ジュノの冷酷さから招いた事なのだが・・・

加奈子の傷心をなぐさめたであろう、若く美しいロイの存在は、鍛え上げられた若き肉体の美しさとジュノにどことなく面差しが似ていた事が、ロイと加奈子、ふたりの間が、急速に深まって行った、  
加奈子の心！

仕事を持たないロイは加奈子の要求する、すべてを、提供し、それは時間であったり、加奈子の寂しさを埋める愛であったり！若きロイの強い肉体は、加奈子の偽りの求めを叶える！

若き恋人の、自由な生き方で、認め合う、ふたりの行動は！ふたりに近い人たちには、加奈子とロイの異様さだけが目立つ事を心配する気持ちと、同じくらい、好奇心を動かして、興味を持つ事だった。

ジュノの知る、加奈子の姿ではない！

別の加奈子がそこにはいる！

加奈子のそんな行動がジュノの心を乱しながらも、どこかで、加奈子の事には触れたくない！いこじなまでに、ジュノは、あえて、聞く事を拒否していた。

加奈子の不自然な行動にも、何の連絡もせずにした結果、ふたりの間に、子供が生まれ、そして、結婚した！

加奈子の決断が、どれほどの苦しみの決断であったか、ジュノの知る加奈子の姿を思いながら、申し訳なさと、嫉妬心の入り混じった、複雑さが、ジュノは、ふたりの事を考え、想像する事さえ、  
打ち消していた。

りつ子は手術後の人格変化とでも言おうか、あの我儘で、傲慢な、りつ子のジュノに対して、ねじりよるような態度が消えている事が、ありがたい事。

ジュノは、死を覚悟したひとが術後に人格が変化した患者さんを何度か見たことがある！大抵は、それまでの性格とは逆の姿に見える事が多い。

たとえば、健康で、はつらつとした活動している時は、非のうちどころがないように思える、性格の良い人、誰からも好かれている、そんな人が、ある日、突然の病がわかり、しかも、手術には、死をも覚悟するほどであって、ジュノの手術によって、大げさに言えば奇跡的に助かった



！

そんな人が、元気に快復後、それまでの人間性とは違う、たとえば、逆の、わがままで、傲慢さをむき出しに！

「自己中心的な人間に変わってしまった姿。」

そんな事例を、ジュノは何度か見ているが、ジュノが思うに、おそらくは、手術後に現われた姿が、その人の本当の姿なのだろうと思うのだが・・・

人は、育った環境やまわりの人の影響で、自我を抑えることを覚え、又、持って生れた性格などを自分では気づかず隠して、常識的で、人に好かれる人間として、それは自分では意識などはなく、本当に自然な姿なのだろうと思う。

大抵は、性格のとても良かった人が、意地悪になったりする事で、まわりの人が、びっくりしながらも、病気が、そうさせているのだろうと、許してしまうのだった。

だか、りつ子は、不思議なほど、我儘も、傲慢さもなく、少しやつれた姿がなんとなく、気を引く美しさを、病人とは思えないほど、白く、透き通るような肌が、上品さを感じさせた危ういほどの色香がある、そんな魅力のある女性だったのか！

「ジュノは正直な感情だった！」

三日ほどのマークの日本滞在も、結果的に、りつ子から、どんな援助を得られたかは、ジュノは知らないが、上機嫌で、笑い転げるように、ロスに帰って行ったところを見ると、りつ子からの融資は、マークを一時的であれ、助けたのだろう。

りつ子の経済的な余裕と死線を超えた者の不思議な魅力を際立たせた、一瞬がジュノには、眩しくみえた！

りつ子も、程なくして、地元、安曇野の病院へ転院して行ったが、ジュノのいる病院を離れる日に、りつ子は、ジュノに話した！

「私ね、本当に、貴方を信頼していたし、大好きだった！」

「貴方を愛していたのよ！」

だから！今！「特別な、プレゼントを、用意しているの！」

まだ、もう少し、時間が必要だけれど・・・

『きっと、ジュノの運命が変わる！』

『素晴らしいものに、変わる事を、願っているのよ！』

そんな、謎の言葉を残して、りつ子は、安曇野へ帰って行った。

ジュノは、ただ、心の中で、たじろぎながらも、今のりつ子なら信じられる！ 「信じたいとねがった！」

そう思うことが、ただ一つの糸口であり、大杉さんや妹、樹里へ繋がる、手がかりなのだから！

季節はめぐりゆく  
いつしか秋のおわり  
何かが美しき人へ  
近づいて来る気配  
それはまだ誰なのか  
美しき人に見えない愛  
冷たすぎた運命  
痛すぎた傷あと  
優しさが心につたわる  
君は私を導く人なのか

ジュノにとって、虚しさと混乱の中で知った加奈子の結婚！

そして、りつ子が安曇野の病院への転院して行った事はどこかで、ほっとした思いがある反面、寂しさなのか、とても気になる・・・

「加奈子とりつ子」

ジュノには友として、又、特別な感情を持った人として、すべてが大切に思う存在や心のよりどころにしている何かが、自分から離れて行ってしまいそうな空虚さ！

「孤独感がつのる事に耐えていた。」

だが、仕事や日常の忙しさによって、精神の落ち込みを辛うじて耐えていられる、ジュノの精神の強さは、仕事によって養われた事なのだろうか、どんな精神状態に置かれていても、外科医としての能力を失うことはない！

『ジュノの素晴らしい人間力だ！』

人は、備わった能力の半分も使われていないのだとか、おそらく、ジュノは、生まれ持った能力が、すべての事にすぐれているのだと思うが、長い苦しみの日々の中で、ジュノ自身の持つ能力を引き出せた時！ たぶん、並外れた気力の集中が出来る人間！

外科医としての能力を、自ら引き出し、魂のすべてをこめて、メスをにぎる事で、素晴らしい結果を生み出す事が出来るのだろう。

安曇野に帰った、りつ子からは、何の連絡もないまま・・・

『特別な、プレゼント！』とは、どんな事なのか？

ジュノは、ふと、岡山での事を、思い出していた、もう一度、尋ねたい気持ちが強い！  
あの、岡山では、具体的な事が何もわからないままの帰京！ 心残りの多い帰京だった。

大杉さんの事も、妹、樹里の行方の情報も、わからない事も大きい、なぜか、無性に直樹に会いたいと親しみを感じている、ジュノは、直樹のいる、岡山に行きたいと心から思うのだった。

忙しい中で、ジュノは、再び、岡山へ向ったが、ジュノは、生理的に飛行機を受け入れられない！

出来ないのだ！ 囚われ人になったような、恐怖が、飛行機に乗る度にジュノの感覚を狂わせる。

だが、仕事柄、そして長く、アメリカで暮らしていたこともあり、飛行機での移動は避けられない事だったが、そんな時のジュノは、知識人としての意識が消えてしまうのだった。

今のジュノには、何よりも貴重な「時間」！

その時間よりも、生理的に受け入れられない、飛行機を避けて、今回も、新幹線を使い、岡山に着いた。

ジュノを迎えに来てくれていた、直樹の姿の優しさが、不思議なほど、ジュノに安心感をあたえてくれた。

それはまるで、ありえない事なのだが、長い歳月を会えずにいた、親兄弟にめぐり会えたような感情とは、このような、心が打ち震える事なのだろうか、ジュノは想う。

ジュノの姿を見た、直樹は、穏やかな美しさと落ち着きのある物腰が、まるで、その場所だけに光が射す、明るい空間のように・・・

今のジュノはそれほどまで、優しさに飢えていた。

十歳の時のあの事故で、すべての運命が変わってしまった事が、ジュノの絶対的な、矛盾を閉じ込めた思いと、並外れた精神力が、ジュノ自身の気づかない人間性をつくりあげた。

秋の深まる田園

凍てついた心を隠して

美しき人はつくり笑い

君は何をみつめる  
優しさが心に痛い  
幼き日々が父を求める  
美しき人が求める  
愛しき人を求める  
幼児の柔らかき手を  
この胸に添えて

(23) <再び岡山での日々>

再びの岡山は、過ぎて行く時間がゆっくりだと思っていたが、この季節は、秋の深まりが、足早に、もう、木々の色も、冬の気配を感じさせて！

紅葉の時期もすぎて、所どころで、枯れ葉舞う姿は、時折強い、晩秋の光輝く、寂しげな、ひとりのバレリーナの孤独な舞い姿のように、くるくると！

突然、空もようが変わり、黒雲が渦巻きながら一瞬の速さで通り過ぎて行く、秋の雨は冷たく、木の葉を濡らした。

岡山駅から、直樹の運転する、セダンは少しの上り坂も、軽快に走る。  
いくつもの峠道を越えて、少しずつ近づく、父の育った家！

一度だけの訪問なのに、父の家の前にたつと、とても懐かしい感情になり、胸が熱くなる思いがした。

直樹は、前にもまして、細やかな心使いをしてくれる。

ジュノが、何を話せばよいのか、ジュノの中で、あまりにもたくさんの思いがあり、言葉より先に感情が爆発しそうなほど理性を失いかけている。

そんな、ジュノの姿をみて、直樹は、優しさ、落ち着きのある言葉で、冷静に、話し始めた。  
私はこの家の者として、迎えられたのは、八歳か九歳の頃に、実の母に連れられて、この家に来ました。

母と祖父母の取り決めがどのような事だったかは、わかりませんが、あの日以後、実母とは一度も逢っていません。

祖父母はとても厳しい方で、子供心に、辛さのあまり、この家を出ようかと何度も、思った事もありましたが、今になって思う事は、祖父母の厳しさもわかりますし、今、この家を守って行ける事は、祖父母の教えが、とても大切であったからこそ出来ているのだと思います。

ジュノさんには、これから、私の知っている、おじいさま、おばあさまから受け継いだ事、すべてを、お話したいと考えていますので、これからも、いつでも、ここに帰ってきてください。

『この家は寛之（ジュノ）さんの家』 でもありますので！

ジュノに対して、遠慮がちではあるが、祖父母の生前の姿を、思い出しながら、ありふれた日常の出来事などを、寛之（ジュノ）が興味を持ちそうな事を選んで話し、時間のたつのを忘れてしまうほど、ジュノは、聴き入ってしまった。

なにしろ、十歳までの寛之（ジュノ）は、正直に言えば、実の父の思い出は、それほど多いものではなかった。

やはり、大学病院に勤める外科医だったが、とにかく、忙しい人で、あまり、寛之（ジュノ）や妹の樹里と一緒に過ごす時間もなく、仕事中心の人だったと思う。

でも、年に何度かは、登山やハイキングをした、父と母、そして、大抵は、大杉さんが一緒だった。

今、思えば、なぜ！両親が登山やハイキングに興味があったのか不思議な事だ、たぶん、大杉さんの影響が大きかったのだろう。

夏休みには、大抵は、八ヶ岳を家族で登り、その時は、いつも、大杉さんがいて、ジュノを何度となく、おぶったり、肩車をしてくれた、そんな時は、いつも、妹の樹里はうらやましくて！

「どうして、お兄ちゃんばかりに！、大杉のおじちゃまは！」

『大杉のおじちゃまは、お兄ちゃんばかり、好きなのね！』

「私にも、肩車してほしいのに・・・」　と言って、駄々をこねて、泣きまねをするのがつねだった。

そんな、思い出をジュノは、直樹の話を聴きながら、懐かしく、思い出していた。

秋の深まった山里の朝は、寒さが、手足にきつく感じられる中を、静かで人の気配も無い・・・静寂と優しい冷気の渡る庭を歩いてみるジュノ！

たまに、感じる木々の葉を揺らしている風の音だけが、この広い庭を、ジュノはまだ、解きほぐせない緊張感をもどかしく、ひとりで庭の美しさを楽しんでいた。

この前、来た時には、気づかなかった、広い、この屋敷には、古い蔵と、弓道場があったのだ・・・

お蔵は、それほど大きいものではなく、もう何年も、手入れがされていないようで、黒い塗り壁が少し剥げ落ちている！

小さめな、お蔵の姿はこの家の歴史を物語るように！　重厚さを現していた。

今のジュノには、この庭の華美さのない、落ちつきの美しさが心や体にすんなりと受入れられる心地よさがあった！　何処となく、見覚えがあるように！

記憶にはないはずなのに、いつも、見なれたような、懐かしい思いが、不思議な気持ちで、この庭の風景を眺めていた。

表現の出来ない感情だった！

言葉に出来ないエネルギーを、ジュノは受けた気がした！ ゆっくりと庭を歩き、弓道場へ歩みよって行く。

誰もいないとばかり、思っていたら、直樹の弓を射る姿がみえた、その姿のあまりにも、しなやかなる姿！

『凜とした美しさが際立ち！』

思わず、呼吸が止まるほど、ジュノの心を揺るがした感情！

息を止め、立ち止まる緊張感！

直樹の立ち姿をみた時、ジュノは一瞬、時が止まってしまったかと思うほどの感動をおぼえた！

全身が熱くなるような、衝撃と言おうか、言葉に出来ないほど、この身に迫る感情にジュノ自身が驚く！

直樹の全身から、放たれる、力強さと、邪心のない無欲とは、このような、美しさをあらわす姿なのだろうか・・・

静寂の中で観る君の華麗なる姿

矢射る無心の君は美しく光り輝き

今は亡き人の魂のように

美しき人に緊張と感動を魅せて

理解できぬ矛盾と混乱

又一个の謎を秋の深まりに染めて

山里の風景は何もおしえてはくれない

ただひたすらに父のまぼろしを追う

美しき人に答えのない問いがつづく

#### (24) <直樹の姿>

直樹の美しい弓を射る姿は、ジュノの心に強烈な印象で、今までの、直樹に対する感じていたものとは、かなり違った。

ジュノは、弓道の経験がないけれど、だが、どこか、憧れるような思いや、興味は幼い頃から、持ち続けていたような気がする。

確かな記憶ではないが、実の父は幼い頃から弓道の修行をしていたと確か、大杉さんに聞いたような微かな記憶がある。

だが、実の父は、なぜか、そのような事を話す事はなかった、実家の事や自分の育った、岡山での事を意識的に避けるように！

その事は、ずーと後で知った事だったが、実の両親の結婚を、お互いの親の強い反対を押し切って、両親は結婚したが、どうしても、正式な結婚として、父の家でも、韓国の母の家でも、認めては貰えないままだった事！

今の直樹は弓道の指導者として、また、祖父母から受け継いだ、この家の多くの財産を管理しているのだと、ジュノ（寛之）に、大まかな、今の、蒔枝家の実情を直樹は話した。

直樹は、今、一番に、ジュノ（寛之）のお墓の事、そして何より、死亡届が出されている事を（後に分かった事だが、ジュノの出生届が出されていなかった）今、弁護士に相談して、おりますので、と、ジュノに説明して話してくれた！

だが、ジュノは、即座に！

「いや！その事は！」

『まだ！このままの状態にしておいてほしい！』

と、直樹に頼んだ！

確かに、ジュノの気持ちとしては、ひどく、ショックな事ではあるし、

『心が穏やかではられない！』

『自分が死んだ人間にされている！』

今、新たに知った、実の父の苦しい胸のうちのうちを！そして、父は、両親から、結婚と同時に勘当された！

だが、故郷を捨て、岡山の実家と疎遠になってしまっても、実の父はおそらく故郷を忘れられずに居たのかも知れない！そんないびつな感情が 子供たちに、父は、自分の故郷の事を話せなか



ったとしても！

『父は母との結婚を選択した！』

父と母の愛の深さを知った事が、ジュノは嬉しかったし、感動を覚えて、幼かった日々を特別な思い出として、改めて心に刻んだ！

忙しい時間の中で、直樹は、ジュノに対して、心から接してくれている事がよくわかる、それが、ジュノには嬉しかった。

祖父母から直樹が引き継いだ、この家の仕事と蒔枝家は！

元々は、日本酒の醸造元であったが、まだ、祖父が存命の時に、蔵元を、信用のある人に経営権をゆずり、株主の一人として、今も直樹は経営を見守りながら、そして、岡山の市内に弓道場を持ち、直樹の、主な仕事は・・・

『弓道の指導者！』

としての仕事と、この蒔枝家の資産管理がどれほどの気苦労が多い事であろうことは、ジュノにも察せられる。

だが、直樹はそんな愚痴を言う事もないし、むしろ、責任の重さが、直樹を支えていると、気負いさえ、ジュノはかんじた。

この私を、なぜ、「死者として」大杉さんは、わざわざ岡山に帰郷して、事故から、一年も過ぎている時期に、祖父母に知らせたのかが、ジュノには、とても、気になる事だった。

その頃には、ジュノ（寛之）は、ソウルで、体も快復して、養父母と暮らしている事を知っていたはずの大杉さんの、この行動が、ジュノには、あまりにも、大きな疑問であり、不安が、つのる事であった。

そして、今なお、大杉さんは、意識的としか思えない、自ら、身を隠している事！

ジュノから、逃げるように、避け続けている理由を、どうしても知りたかった、その事を知った時こそ、妹の樹里の行方も分るのだらうと、思うのだった。

だが、ジュノには、考えもつかない、場所！

『ジュノの身近に！』

とても近いところに、樹里はいたのだった。

その事がわかり、ジュノが、樹里の存在を知る事は、まだ、長い苦しみの時間がジュノには必要な運命だった。

美しき人のそばで密かにみつめてる  
今はただ大切な人の心押し殺して  
抑えきれないほどの苦しみは私だけでいい  
大切な妹は彷徨いながら  
私とのめぐり逢いを待ち続けて  
うつろいの心と時を刻み続ける  
父と母よいつかきっと叶うふたりの再会を祈っていて  
にがい涙をかむ美しき人の願いはきっとが叶う

(25) <直樹の美しさ>

直樹は、ジュノにどうしても見て欲しい場所がたくさんある！祖父母から受け継いだ、蒔枝家が今、所有している物や、大切な蒔枝家の歴史や、伝える事の多さに、二十七年の歳月の重さを、今、改めて切なさ緊張感を覚え、ジュノ（寛之）の残酷な運命を思い、心が暗くなるけれど、そんな思いのすべてを！

『一本の矢にこめて、直樹は矢を射る！』

精神の集中、その事が、直樹の、平常心を保つ事のできる、唯一の方法だった！  
今、『明かす事の出来ない、悲しみと苦しみの真実を隠して！』

真実を知った時のジュノ（寛之）の驚きと混乱する気持ちを考えると、直樹の心は、平常心を装いながらも、すぐそばにいる、ジュノへの背信行為のように思えて、ひどく心が痛く、辛かった。

それは、たとえ、ジュノ（寛之）への心遣いであったとしても、直樹は苦しかった！

無心に矢を射る直樹の姿は！  
あまりにも、威厳と、輝き放つ魂を感じて！

ジュノは、これ以上近づいてはいけない！  
そのような感情にかられて、ジュノの体がまるでその場所に固定されてしまったように、立ち、直樹の矢を射る姿を、息を止めるような思いで見ている。

直樹は、立て続けに、十本の矢を射り、ようやく、ジュノが観ている事に気づいて、十メートルほどの距離を小走りして、ジュノに、近づいて来て・・・

「おはようございます」  
「良く、眠れましたでしょうか？」  
と言葉をかけてきた。

その、走りよる、弓道胴衣姿の美しさが、まるで、若武者の絵姿のようで、ジュノは、昔、絵本か何かで見た、「牛若丸」のような、絵姿を見ているような、錯覚さえしてしまいそうな気がしていた。

そして、「直樹の眼が、涙で潤んでいたように、感じて、その表情の、透明感が、悲しげで美しく見えた！」

直樹の全身から伝わってくる、何かを、ジュノは理解出来ないままに、不思議な感情が、直樹に対して、申し訳なさと、わけのわからない密かな罪意識のような感情があることに戸惑う！

思わず、「直樹を抱きしめたいような、思いに駆られたことが、ジュノには、驚きと言葉に出来ない！

『清潔感のある欲望！』

とでも、表現しようか、そんな感情が同居していた。

直樹のかけてきた、言葉に、すぐには、答えられないほど、うろたえているジュノの心を、ひた隠して、ジュノは、「おはよう」と一言の挨拶をした。

ジュノの今までの人生の中で、出会ったことのない、情感！

この、気持ちを持って余すほど、整理出来ずに！

ジュノは、知らず、知らずに緊張していた。

しばらくは、ジュノの中で、突然、現われる、直樹の弓を射る姿に、心を乱されるが、それは、決して、不快なものではなく、むしろ、心地よい感覚でもあった！

今日の夕刻には、東京へ戻るジュノに、直樹は、ゼヒ！お見せしたい場所があるので、朝食の後、すぐに出かけましょうと、ジュノをせかせるように話して、準備を致しますので、お先に席を立たせてくださいと言って、直樹は、部屋を出て行った。

そして、今、はじめて会った老婦人が、ジュノの食事の世話をしてくれて、挨拶をして・・・

「直樹さまが幼い頃に、この家に来られた時から、お世話させていただいて、おரிまして・・・」

今は、こちらの、離れに、住まわせて頂いております。乳母の「金崎ゆき」と言います。

『どうぞ、直樹さまを、お攻めにならないで下さいまし！』

何の認識もなく、唐突に言われた、この言葉が！

「直樹さまをせめるな！」

そんな言葉を、ジュノは、どう解釈すればよいのか・・・

朝の少し冷えた風が美しき人をつつむ  
貴方を大切に思う心は紛れも無く真実  
今、見せている偽りの行為が心の自由を奪う

いつかは真実に触れる美しき人の感じた想い  
そっと抱きしめたいほど切ないこの心に戸惑いながら  
少しずつ貴方に伝えたい言葉が消えていく  
愛こそがすべてのはじまり運命のいたずら

(第三部へつづく)